頒布發句集

乾

修しゝ事止きれた必妙
境小入とゝ也師硯布
乃翁を然雅知たゝ
傳うしてゝ志ゝ元録
在世に古仏を傳り
弱冠の昔ゝり九十余

暮の未期まで俳諧乃
外仏念形々々住空門
古今独を丹田に練磨
しこなを重ねて子精
す為古今実に念仏三
昧の人なり〳〵果〳〵

活作死形を歌ふの
少〳〵事次〳〵十有三
回の忌辰まで南れを一去
乃至慧之門の一門を撰集
して世の同好ふ弘うし
且八冥福ふ伸ぶ是只師

恩を報ずる事なくして
徒に九牛の一毛に比するのみ
あゝ政事の秋升降岸は
可布菴逸淵誌

隠居

川村碩布翁
肖像

行年
九十四歳卒

蕉園序

故を温て新を知るとは古の冊子を我云捨てし等と社思ひ出るを
たゞ一布恩園と名付て愛吟の蕾を
社芽をさそふ古の業を集て集とする而
めし句集の度ごとに物るき等をよく
阿波の忠よく忘れて其俳諧を立
毎し花を一時奇流の多傳て

此布恩園をつくるに事おきを
見るを初て是を好こと社を自社しむ
人と大射し等は風を愛るよい
あるまれ也きつゝ社友と者のふるき
を経て新きをしる社会ふ
まる者ゝ名人と云て保七丙申社妻
阿布一言ゝ云ふ

頑布居士發句集

春之部

元日ハ不斷さゝの隱居哉

去津屋中濃を濃の春

きゝ〳〵近〳〵梅と始日の出

肘袂のおもゝ妻庫哉

居て社梅子居て之の春

何も彩ハ野山也云中巖の妻

門松を枝をしてをおく山家の形
つまや嶺おれ生の山を高き
四海波しつのうをを寄の門松
毎年ゆ門や松をうん松を作
笑ふや母のうを帝のきぬうを
仏神もや世捨人おうをぬを
立を居る人のを出に鶴鶴の
万歳の皆祝うをを降り年

遠近よこのまりぬ恵方参りの形
蓬莱を二仏よ居る市日を
見学は他人のを見ぬ学始め
笑海に大尾掲の形うり
正月を笑よ着るし恵方
豊門は鬼おり出ぬる北方
七種や三種つをひつおを
明年を祈しし健康の菊を

里行くや子日遥かの小松引
古義尤や松のうへの小松より
宮もるや妙なる芽や芽の所
数入の結まり什形り埋る栗
残る雪山の遠き高き中き
きく水きく春のうきや雪の尾
思ひやる水のうへ屋の古流の
暮よりも書くも消き雪分

春雨の降ふり降り山
ふ降りと思ひ分るを残る雨
春雨の不所紙を寄る春分
汐風の何人見ゆるや春の風
春の所を日の出を浦るの春
急度と那境や松の芽
立栄大行きうぬ梅の花
附人の春よりまる梅見春

庭の中に植ゑたる梅の花
を袖とりつゝ云ふもうるはしの花
を手に玉ぬきつゝ長せる梅の花
うるはしき哉 白ふ三月 吉野
の里にと市義なる梅の奥
ふかき雪を曙ひ分て梅の花
梅を見て歌を詠ける 月 歌 春
山桜を用ひ給て梅白

おもに雪を白ふ 鶯と梅
とくるを待ふ梅の花
咲ふして梅の香を捜ふ
野を山に出つゝ梅咲
加茂川の水潺梅咲
のぼり上りくさを堅梅の形
梅よりの書芳を事 桃 花
朝日に二度問ふ梅の手ふ

浦の梅さくらのやうに義よりも
咲いそぎて春にうれ遅し
紅梅や白きまぎれぬ日の影
うるはしと春を迎へる柳かな
歳うち庵の門おろす松の丸
書初や見てうるうに巻の中
門柳巴の影をもかすかなり
岩無木の花とうえぬ椿かな

折枝のまゝ松にうゑ椿哉
岩組の間をくゞる菜の花
うゝ忠寺をいとる見すり東山
黄鳥を本尊にして岩の庵
梅ぞ春や癖吹きる松かな
うゝ人も春にしや雪崖の百合
ときはよりの出来て岩元の
鳥の巣の浮ぶる船頭寒

谷を樹を穿るいろを紫雲降
大空を見てしほまぬ蓮の子
蓮子や生成育ちのおもかる
尾ふ先い通りかりの性の形
ちちちる横森の出来ぬ性奈
蜂の巣や寄ぬまでに去をおん
一陣吹風下る南陸の九
枝ちりまるまま一葉ふ出ちふ

人去見を泪おかたや風と廉
のちきたきちりぬる出ちこの形
長保さま岩を碑九りきふ
白雲の絵竹くや山りふ
日の永き秋降る雨にちる形
夜の日や先りくを良海
ちる時日を越いせをおく実竹奈
夜の秋や紫ま橋をまま渡れ

昼ゝ絶い云るの事は形一重の自
分る自叔統ゝ云へのおもしろ形事
朧夜やうきまゝ多く思ふゝ
ゝ寄の限る時き霞の孔
引とせて形ゝ見ゝ一の作ゝ
山寺に寄ゝ見ゝ二自春
出代ゝの来て姫一き山家形
出ゝ寄ゝの日の夕陽ゝ大国情裏

年夫婦ゝ重ゝ一ゝ男ゝの形
いゝの形ゝ寄き矣作ゝ見ゝる
畑打ゝ絹縫ゝの事は寄ゝ
焼堅ゝ只四五日の名形ゝ
田の中に寄ゝ絶也ゝ焼堅ゝ
野鳥のふゝゝを花彼岸形
よきまゝい独ぬゝ思ゝ長ゝ
長山をゝの色ゝ見ゝ菫角

おもて　茅舎を居の内かな
陸こなの一本立つる春の雨
多入て橘くさ体木の芽哉
芋雑の根ぶりの本末拾ひ来
初花や咲きそめし程さわき
九日まで残るさぬ春や支度掃
老ぬ紙い花まのまゝ行
森を分いりる道低く笠の中

きのぬ橘の尚大切を支度かな
所思ひとい見えぬ花よ人
浮山本寺のうら紙る掃部
迄て大学えのさゝ咲まり
ときはをつゝせを咲はる春
能ゝ紙い掃きあき月夜
皆さいう貴に形ゝ山さゝ
早蕨や高山巖社ゝい雲

長松も柏子も形るや巖折
立て終い枝も赤るる小菜の花
蒲公英の土をの子を吹に行
我庵の自然よせ陸くく
松菌より引付て来る杉菜公
陸こ子が廣野るる松の蕊
山吹の風形引まるな海の那
藤さくや海野を出一本

妻の子次男三回の出来に子
海棠の実野も赤ぬりき春
雨降て咲て海や梅の花
梅の目を松まて宿す菴の那
子子や野に張る房の形
彼と是と子ひ合ひ秋の雛
出るや思ひ形る花る日
陸ら川漁平の沖の人参

雲食ハ尾い毎日六の通り
相模ハ遠くよんまの系り
峰入ハ六いる里社子佐の郡
雲に我いる象よ入に引
鳥雲よ雲を遠くに茂より
初雁ハ来ハ来ハ久る春
鮎汲と居時る人と親よ形
一る刀串ハ来ハ来ハ業

見ぬ人ハ雪ハ雪ハ海雲ハ
ハ雲象のハ来ハ蚕ハ引引
陣ハ二ハ見ハ海ハ象ハ形
見て居るに見ハ来引 墓
墓の墓ハ雪ハ来ハ引ハ
言俳ハ見ハ無理形ハ来るの山
いハ来ハ波ハ来ハ原ハ墓社山
墓の夕夕山時て来の時引雪

鶯下りて浮まるの水
矢を番ぬ引きくひ長谷海
山も秀峯抽く長引き
月長を中きしまる舟路長
雨屋の遠皆を行て長の月

夏之部

黒の代や地下の地下も青蛙
引まくまれ鳥とまきまき
氏よりも高ちくひ白のまね
をかゝぬ命作るもの蛙
袷着てまきまる冬部
袖形や時折りの夏衣
陰深の角にはまく蒙提の乱

夏に入るや痛い痒いなどと人
様又程よき薬を求め自宅
にて夜の寒さに堪へる堅城に
先月を待て帰なり加賀きた
東遊びの云訳為ぬ所に帰
り次を終る頃なれば又
きぬの小雨あり時鳥
我まこの庭に病の山を望

き白い雨よりは降ってきた
一寿に二十日旅して時鳥
時雨まぬ形しき白よりぬ時を
杜鵑なくや清流の外より戻る
雨しまくれ去形なる子規
まき堅の寒つ様より雨やこえる
肩のるる法を雨を雨に開古と星
鷹飼の柳はるを奥儀春

この月の昼い出ぬまとの南
堂い者一の思ひのかま陸を
里人を向ふに垂て蕚の花
杜若山路ひ陸も形し
和の花に数の巌ほらぬ堅未ル
和の花にまし木の色し形ち
春酒のれ立てゐる牡丹郷
白布角大根を立て屠る書

苟某邸 盛まれまま咲き
美葉よき春ふ春ふ言ませ
島山の不形ふ春し義ル
加しいとて急ふい出ぬ百木立
木ふ春て春ふ陸角ふ陸る花
葉まふふ春て接種の自陽春
ふふまきもの光意木の巌葉ル
都まてよきもふ春松葉

枝にのり捉てなきしぐれ雲
手弦義出して形ある芭蕉庵
年と共の当も流きこの郡
書秋や冷るよりする唐のうた
咲しとて人のうたはる著莪の花
咲形なる源を通る黄の形
小さかしこ捉子咲ぬ柳の付
学問花の探いちぬ太の月し

ほちまねのハ月ある人ハ
志ゝを見捉い尖ほす美人等
書漬よ大き形柳の形りの事
武士の作拾て居る芭蕉庵
見の事より義使いたの栗の花
岸の色よりも せぬ夕色郡
二三日繋ぶて名市藻の舟
吾等にしていまきき右蘭ハ

手よとゝ打い百姓の出こりて百姓の
業をしていそがるゝ早苗舟
養切て其姿わらに寄る田植角
家毒ひのまきはしる田植の
子をうむや田植の留守の留守も
留てめのもしも留守も探奈
ふきぬてん見うゑなる新田の色
絵のよう打渡る稼ぐ郷

貧乏をあしこうる鍬ゝ奈
お打い凡市地の形ゝ郷
こうゝ市寺の番清の紙使ゝ
降る日ゝ去角ゝ五月雨
月先る人の家形ゝ奈白
雨を寄るゝ五月小
生を長ゝ大ゝまるや市きき周
梨子の葉の蔭の蔭ゝ奈の蔭ゝ

大和路や峰ふる時の五月雨
百の山帰るさびしい形りに雪

大磯略立尾首言分まりしに

虎の雨まと降るの出来よう
雨さへ奏でき雨まこと
旅寝おい雨の信も紀と伝
はこのとをふきけをおく強風
松信よ入て日傘のつるるの

蚊帳形まぬうちをまく思ふ事
多種まを曝ひまこ蚊ゆ蚊
蚊帳を吊し
行灯のきやをこの為を蚊に
蚤蚊にも巣をもを毒を思ひ
この種家に蚊の隠き蚊の形り
蚤の行雨をこと形に蚤筆
線香の立消まる市蝿の寿

枝をゆる事時し来れる物
田の末や松よりの皆色なる
海よいうしろ明り市乗
取りて足袋いたき蛍二の角
きは蟬の音を樹ふ迄
くく鼻のきくやうす形り帽半
宵寒しとある中万年青よ枝蛙
芝長よ何をいるくを相ぬ市鳥

鳴のきは明りよい形き浮巣
飛ひき鶏り移よ之を長き
秋麻よ市を長ふ明ふくり角
鬼よりを孩まき世し花子森
くの人を見る中は事の空明り
篭の帖市日人を市を市
六月市柳のを行し飛月
草津よを

六月のうちをのがれて秋の
月雪を想ひ出もまた人間の
大掃除を待つるかな用心
高き一寸先のつえぬかり
暑きなか思いせるのもり雲
砂の上に海松一房のはかなさ
茶と煙草と中ぶきを時を慕るく
結酒を居て生涯やはこのもる

涼しさをよく味ふる自然来
きしきや猫も杉の一ふる事
下駄をはいて二階より涼しさ
貸す人のんきしやあこのもり
遠眼鏡見るなり涼しさ
業平ゆかしみを行るを
暑疲れ宗匠ふりの蚊の気
百やきい江湖坊主のまのう来

月煙と一度は出るかり二日の月
そらんとて云ひしきこえ暮社自
夕立の降ぐい俄ふる濯きこの郡
蓬さそや二度の降とあるまる
降まとあるまる形り苔の花
約葱形きけ赤ふる赤さこ森
ちらと拾葉の枯る春田の車
昼点を見てあるんあのみし

とうを蓮の葉の浮葉森
ういし根の水陰のひ赤紫五
蜻蛉や屋のこるまたみこ市形き
川二のの留まの流名や工の川
川物のはとや青葉の流きひ
むきの月と広の置雲の形子等
広むきと昼森いわ名に赤ひ子
菖蒲社二のひや菖の下流き

種々さまざまの雲母ん方
智恵を形く自ら出来ん方
舟よりて何をまうて富士詣
罷なる者も法被の方ろ